

第 13 回「京都御苑ずきの御近所さん」

上京区長

中谷 香 様



■上京区長の仕事について教えてください。

今の区役所の役割，区長の役割というのは地域を繋ぐことだと思います。昔は「親方日の丸」と言われていましたが，地方分権が進められる中で，一番大きなきっかけになったのは阪神淡路大震災です。「行政は当てにならない」と言われ，「ボランティア元年」と呼ばれるくらい，地域の方の中で「地域のことは地域で守らなあかん」という動きが出てきました。その中で，区役所の役割も徐々に変わってきたという実感があります。私は区の行政に関わる期間が長かったので，20年前と今とを比較してみて，変化を感じています。今の区役所には，区長の顔が地域で見えるように，地域の活動を支援，お手伝いするという役割があると思います。

京都市政がスタートしたのは明治22年ですが，その10年前の明治12年には上京区と下京区が設置され，その時から区長がおりました。そのまた10年前の明治2年に，番組小学校※1という日本初の公立の学校が，地域の人たちの手によってつくられました。その歴史が上京区には，いまだに根付いています。なので，他の区よりも行政に頼らないというか，自分たちの学区を中心に自分たちで活動するという精神が根付いています。

歴史の長い上京区と下京区の中でも，特に上京区の堀川より東側には，御所があり，相国寺があるという誇りを地域の方は持っておられます。堀川の西側は，聚楽第がありつつも，畑を中心としていて，東側とは文化が全然違います。それぞれの成り立ちによって，印象が異なります。どんな場所にも地域性があるって，町づくりに関わる以上は，その地域性を押さえなくてははいけません。私が上京区長に就任した時，区の方に地域性についてお聞きしたんです。すると「堀川通から西と東」とおっしゃるんです。堀川通から西と東で地域性が違う，と。面白かったのは，「災害が起こったら，みんな東へ逃げたらいい」っておっしゃるんです。「御所があるから絶対，物資が早く届く」って。「順番で言うたら絶対東」と誰かがおっしゃって笑いましたね。

今，上京区の魅力を発信していくために，段々衰退してきている西陣地域をもう1回アピールしようと，逆に「東陣」にスポットを当てて動いています。「西陣というのは，東陣があつての西陣や」と言われて，私も目から鱗でした。応仁の乱では堀川通を挟んで，この狭いところで11年間戦っていたんです。「なんで西陣の名前が残って，東陣の名前がないんですか」と素朴に聞くと，西陣には乱が終わった後，織屋さんがみんな帰ってきて，機織りをしだしたそうなんです。そこで，それをどう打ち出そうかという時に，「西の陣やから西陣織」となった。ですが，住所には西陣の名

※1 明治維新後の京都近代化政策のひとつで，日本で最初に設立された64の小学校。住民の自治組織であった「町組」が「番組」に再編成され，各番組を学区として，番組ごとに学区制小学校が設けられた。

前は残ってないんですよ。太秦や西ノ京などは町名に残っていますが、西陣は西陣郵便局や西陣織といったところにしかその名は残ってなくて、住所にはない。では東陣は何故なくなったかという、「貴族やお公家さんばかりが住んでしまったとこやから、別にあえて西陣のように名前を残す必要がなかった」という話を聞きました。

そういった歴史の話は上京に長年住んでいる人でもあまりご存じなくて、昨年2月に開催した歴史シンポジウムは大変な盛況ぶりでした。昨年は、参加者があれほど集まるとは思ってなかったこともあって、当日の受付で大変なことになったので、今年は、「京都いつでもコール」※2で申し込めるようにしました。申込受付初日の半日で応募が300人を超える程で、みなさんすごい関心がありなんですよ。

そういう意味で、地域から発信される「こんなことがしたい」という思いを、どう上手く行政と一緒に実現していくかが重要です。地域の人の活動は、行政が後援したり支援したりすることで、「あ、この団体は行政と一緒に活動してるんや」というように、周りから見られ、信頼感が生まれるんです。今の区役所にはそういった役割がある。一方で、窓口に来られるお客さんのために、福祉の分野や保健センターの充実といった側面もちろんあります。

区長の顔が一番見えるという意味では、各学区の敬老会や成人式、夏祭りを回ることも、大切な仕事です。特に上京区は、「区長、区長」っておっしゃってくれます。私が勤めた区ではそこまで区長に拘りはありませんでしたし、副区長をしていた洛西でも、ちゃんと区長と仕事の分担をして、「防災訓練や敬老会は副区長」というようにしていました。ですが、上京区に来てからは、秋口などは十何箇所も掛け持ちで回って、駆け足でも「来て欲しい」って言われますね。もう、有難いやら何やらで。地域の人にしたら、「区長が来てくれはった」というだけで、特別に感じてくれて、そこが他の区とは本当に違います。みなさん大事にしてくださるので、有難いですね。

そういう部分は「ザ・京都」だと思います。文化庁が京都に移転してくるのが決まりましたが、「文化とは何か」と改めて考えると、なかなか掴みどころがないじゃないですか。市長がいろんなところで御挨拶される中で、「文化は市民生活の中にある」というふうにおっしゃっています。上京区なんてまさにそのものだと思います。お抹茶を飲む習慣にしても、日常的に抹茶を点てるという習慣がどこに行ってもあって、運動会の激励に回ると、お抹茶とお菓子を出していただきます。小学校では地域の方がお抹茶を教えたり、他にも生け花や浴衣の着付け、機織りを教えたりしている人がいます。上京区の人を見ていると、自分のお子さんがいようがいまいが、小学校のために地域の方々の方が力を惜しまないというふうに感じます。

上京区では特に小学校の学区単位が重視されていて、自治会活動は小学校が統合されても元学区単位で動いています。西陣中央小学校は4つの学区が統合されていますが、校長先生は全部の学区の夏祭りに行かれたり、3つの学区が統合されている新町小学校区は、少年補導の支部がみんなで連携して、いろんな事業を3支部、4支部合同でされていたりします。以前、お餅つきの行事があった際に、合同でしようとしていたはずが、「お餅つきのやり方が違うから、一緒にできひん」となり、日にちだけ統合してやっていました。私も3箇所、餅つきに回りましたよ。「文化の多様性」と言いますが、面白いですね。「なんで餅つき一緒にしはらへんのですか」と聞いて、「やろうとしたけど」とおっしゃって笑いました。餅のつき方とか見てたら、確かに微妙に違うんだと思います。拘りがあるんでしょうね。

※2 京都市が運営する電話サービス。市政の受付や制度、イベント、施設などに関する問い合わせを、年中無休、朝8時～夜9時まで受付。

一番驚いたのは、地域の人との何気ない会話の中で、「中学生の娘がお茶点でしてくれるようになってん」とか、「大学行って家から出た息子に、『母さん、みんなお抹茶飲まはらへんで』って言われたわ」とか、そういう話が出てくるんです。「そうやろなあ」と思うんですけど、上京区の人には気づいてないんです。

だいぶ少なくなっていますが、まだ元旦に町内の角々で集まって、お屠蘇を飲みながら年始の挨拶をされるんです。私もある学区に呼ばれて、2年続けて参加しました。元旦の11時に、小学校のコミュニティーホールに各種団体の長さんをはじめとした30人くらいが集まって、お屠蘇を呼ばれながら、団体長が今年の抱負を言って、みんなで写真を撮るという1時間くらいの集まりなんです。また、今では唯一^{けんりほう}乾隆小学校だけですが、元旦に子どもが登校しているのを知って、驚きました。京極学区や待賢^{たいけん}学区、仁和^{にんな}学区では、学区の成人式があります。ずっと当たり前のようにやられていて、小学校卒業から8年後に、担任の先生と卒業生が集まるんです。やはり先生が一番喜ばれますね。「地域の子どもは、地域で育てる」というふうに行行政は謳い文句としてよく言うんですけど、上京区は既に実践されています。

やっぱり137年続く上京区では、地域自治のあり方が他とは違うんですよ。上京区長になって、何が他と違うのか考えた時に、自分たちが学校をつくったという思いが連綿と受け継がれている点だという結論に辿り着きました。学校には西陣織の糸人形が飾ってあって、前世紀のものに触れる機会がいっぱいあります。几帳なんかも上京区では上京税務署だったり、小学校だったり、あちこちにある。そういうものがあちこちにあることも、上京区の人には普通だと思っています。区役所にも山口安次郎^{※3}さんという、能装束を織られた唐織で有名な方の作品があったり、富岡鉄斎^{※4}の書があったりします。他にはない、値段の付けられないような宝が上京にはありますね。

■区長はこれまでどのような仕事を手掛けられてこられましたか？

私は、市の職員になって、区役所行政の担当が長かったこともあり、市民と直接接する仕事がしたいなと思いながらずっとやってきました。

洛西では「生物多様性の保全」に関わっていました。大原野のブランド戦略で、藤袴^{※5}や休耕田を使ったヒマワリ畑を農家さんと一緒になってつくっていました。洛西ニュータウンに対する市長の思い入れが強くて、「京都市内で生物多様性の町と言えば洛西ニュータウン」というくらいでした。40年間、拘って街路樹を植えてきたので、その中に新たな生態系ができて、生物多様性の町として打ち出しました。街路樹の種類が通りごとに違って、すごく綺麗なんです。なので、洛西ニュータウンに住んでいる人も街路樹に拘られるんですよ。街路樹の切り方や時期についても、葉っぱが落ちてきて足元が滑ることよりも木の方を大事にするくらい、住民は意識が高いんです。洛西では「みなさんが日常的にしている保全活動が、生物多様性に繋がるんですよ」とすごく発信していました。ニュータウンだけの「洛西ケーブルテレビ」があって、そこでどどん情報発信しているんです。子どもたちも学校で町の生態系について学び、それらを生物多様性保全という視点で取材・発信されています。京都市の中でも、洛西が一番生物多様性を身近に感じてもらえる地域だったので、そこに携わることは楽しい仕事でした。

※3 西陣の織匠。1904～2010（明治37～平成22）。

※4 京都生まれの南画家。1836～1924（天保7～大正13）。

※5 フジバカマ。キク科ヒヨドリバナ属の植物で、秋の七草の一つ。花期は8～10月。

町づくりを展開してきた中で、一番印象に残っているのは、課長をしていた伏見区深草支所の時です。深草には野焼きなどで環境問題になった地域があり、その南側に不法投棄されたゴミで溢れていた大岩山があります。藤森神社が南にあって井戸水を使うから、「山がそのまま放置されたら伏見の水が汚れて困る」というように、地域の方の関心がものすごく高かったです。それまでも不法投棄があったら地域の方が区役所に通報してくれていたんですが、行政としては「京都市の市道に出してくれたら取れますけど、民地にあるゴミは取れません」という、ずっとそういう対応を過去にしてきてたんでしょね。その通りではあるんですが、言われたゴミだけ取って終わりになってしまっていて、いろんなものが大量に捨ててある状態でした。

大岩山のすぐ近くに京エコロジーセンター※6が^{みやこ}あって、そこに環境サポーターという地域の方がたくさんおられました。また、他にもこのゴミの山をなんとかしたいと思って活動されていたグループもあり、その方たちが筆頭になって地図に写真を貼り付けて、区役所へ持ってこられました。これがきっかけで、ゴミの山、大岩山の一斉清掃活動が始まりました。そのお蔭で、今では、大岩山には展望台ができて、町歩きのマップまでできている。お金をかけてゴミを回収することはできませんけど、そうじゃなくて、地域の方と一緒にゴミ上げをしたんです。まさかここまで地域の人が動かれるとは思わなかったの、本当に驚きました。竹林の中にいっぱいあった、冷蔵庫やテレビ、それからいろんな家庭ゴミを、みんなが必死になって引っ張り出すんです。きっと家電リサイクル法ができてから、業者も捨てて行ったものだと思います。山盛りのタイヤとか、ペンキ、パチンコ台、バイクなんかもありました。大岩山は山科区から伏見区方面に車で抜けることができるので、捨てて行きやすい。警察とタイアップして、パトロールして検挙してもらったりもした結果、一年半くらいで綺麗になりました。まさかと思いましたけどね。100人くらいで町歩きのワークショップをしながら、「どうしたいですか」って聞いて、「ここが展望台になったらええなあ」とか「お花畑」とか、夢を語りながら動き出して、それが実現したんです。

伏見工業高校の学生さんが啓発の看板をつくって、藤森中学校と深草中学校の生徒たちが「投棄ダメ」とか「ストップザ温暖化」という絵を描いてくれました。竹林から出してきたゴミは、土木事務所やまち美化事務所、京エコロジーセンターに声をかけて分類しながら処理しました。NPO団体や、地元の大学生、高校生、地域住民延べ1000人が参加し、それで実現できたんです。その後も年に2回、みなさんと清掃活動をしなが、何かあったら通報したり、監視カメラを付けたりした効果もあって、不法投棄はだいぶ減りました。警察のパトロールも含めて常にいろんな抑止効果があって、やっぱり綺麗になったら捨てなくなるでしょう。

大岩山の土地は民地なので、ゴミを上げることにするハードルがあったんですけど、環境局から、住民みんなの活動で、地権者の了解が得られるのであれば大丈夫と言われたので、50～60人はいた地権者に呼び掛け、協力を依頼しました。展望台にする予定だった一番大きな土地も、地権者が地元の方でしたから直接お話しして了解を得ました。その辺りは行政の仕事としてきっちり協力を得て進めました。

たぶん今もそれがずっと続けられていて、どんどん良くなっています。大岩山には堂本印象※7の鳥居があるんですが、私がいた頃はそこまで手をつけられなかったんです。下から鳥居へと上がっていく道が、今整備されているみたいで、地域の方が大岩山を深草のシンボリックな山にしていこうと、すごく積極的に関わってくださっています。

※6 気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）の開催を記念して開設された京都市の環境学習と環境保全活動の拠点施設。

※7 京都市生まれの日本の画家。1891～1975（明治24～昭和50）。

環境に関心がある方が多いですし、ゴミを上げるという目的がはっきりしていたので、当時はいろんな場所から人が集まって来られましたね。「この日に清掃します」と言うと、「人伝手に聞いたから」と他都市からも来られて毎回100人を超える人が集まってくれ、すごかったですね。地域の農家さんたちもお礼に山の上でみんなに豚汁を振る舞ってくれました。ゴミを上げるだけじゃなくて、それをきっかけに地域の人が繋がって、町づくりが進んだという、大きな動きでした。

その時、伏見稻荷をスタート地点として、東山を回るコースが京都一周トレイル^{※8}に追加認定されていました。私はゴミを上げるのと同時に、もうひとつ「深草トレイル」をつくる取り組みをしていて、稲荷から南に進んで大岩街道までは竹林が綺麗な道を歩けるので、そこに伏見工業高校の学生さんと地域の人が協力して、深草トレイルのマップをつくり、トレイルコースには案内板などを設置しました。これも伏見工業高校の学生さんの手づくりです。自分が一緒に取り組んだ成果なので、最初の深草トレイルのマップを私は今も大事に持ち歩いています。藤森駅や稲荷駅の公園に、今も「ぐるりん歩」と書いてある深草トレイルの看板が立っていると思うんですけど、一緒につくったものなので思い出深いですね。私が伏見区を離れた後も、大岩山がどんどん綺麗になる度に「深草トレイル」を南へと進めて、マップを繋げてくれていたんです。そこでようやく市が「京都一周トレイル」に認定してくれました。

桃山御陵前からスタートするコースは最新のものです。2年くらい前に、そこまで伸ばすことが認められました。始めた頃から思うと夢のような話です。私たちは最初「大岩山をコースに含めるのは絶対無理やし、大岩街道から北側だけで深草トレイルをつくろう」と話していましたが、実行委員会の委員長になってもらっていた京都教育大の先生が「そんなんあかん。この大岩山も含めて大きなコースをつくらなあかん」とすごく大きな夢を語っていらして、その時はただただ感心するばかりでしたが、実現できたんです。

あまり気づいていなかったのですが、大岩山を歩く人が思っていたよりもたくさんいたんです。あのゴミの山ですから、歩く度にみんながっかりしていたみたいでした。そういう思いのある人がたくさんおられたということです。私が印象に残ったのは「やっと行政が動いてくれた」と言われたことです。「行政が旗を振ってくれたから、みんなが関わられた」って言うてくださったことが、嬉しかったですね。任意団体が動いても人はなかなか集まりませんが、行政が旗を振って「みんなとやりましょう」って言うると、たくさんの方が集まってくれて、「自分たちの町を綺麗にしよう」と声を上げてくれる。

上京区で「東陣」と言って魅力を発信していくことも同じだと思うんです。まずは気づいてもらって、「やろう」と言ったら関心のある人が集まってくれる。口コミで広がるということがすごく大きいです。大岩山にしても「ゴミの山を綺麗にするんや」という口コミで多くの人に広がりました。「東陣」でも昨年参加できなかった人たちから、「次はいつですか？」とか、「入れへんかったわ」とか言われて、口コミの広がりを実感しています。

上京区の方は、観光客が来ることを当たり前のように思っていますが、上京区の人に改めて上京区の魅力を語ってもらうことで、より上京区の魅力を多くの方に知って頂けるんじゃないかと思っています。みなさん自分の学区を中心に地域を大事にされているので、今まであえて語ってこなか

※8 ロングトレイルのひとつ。京都の東南、伏見桃山から、比叡山、大原、鞍馬を経て、高雄、嵐山、苔寺に至る全長約83.3キロのコースと、豊かな森林や清流、田園風景に恵まれた京北地域をめぐる全長約48.7キロのコースからなる。京都市をはじめ、京都府山岳連盟、京阪電気鉄道、阪急電鉄、西日本ジェイアールバス、京都市交通局、京都大阪森林管理事務所、京北自治振興会、京都市観光協会からなる「京都一周トレイル会」が整備。

ったと思うんです。この「東陣」をきっかけに新たな魅力を知ってもらって、外向けの発信ではなく、上京区の人同士で話して行って欲しいと思います。そうしたら、また口コミで広がって、さらに新しい魅力が広がっていく。この気運を上手く盛り上げていきたいと思っています。

やはり本当に「人」が大事なんです。地域のキーマンの方と話すと、話が広がっていく。そういう人が地域にいなかったら動かないですね。「行政が言うさかい、しゃあないからやるんや」となってしまうのはダメなんです。

そういう意味では、キーマンに接しながら地域と一体になって動いていくことも区長の魅力かもしれませぬ。どこの地域にもそういう人がいますが、私は熱い思いを持っている人に会うのが好きです。

■上京区の環境保全の取り組みを紹介してください。

地域の人が環境という切り口で取り組んだ訳ではないのですが、藤袴を地域で守ろうとする取り組みがあります。私にとっても不思議な縁なんです。深草でも上京の話とは別に、「藤袴を深草の花にしたい」と言われたことがありました。大岩山が綺麗になったことがきっかけで、そこに秋の七草を植えたいと地域のみなさんが言い出したんです。「秋の七草といえば藤袴やな」と思っていた時に、KBS 京都^{※9}が源氏物語千年紀を契機に「守ろう！ 藤袴プロジェクト」というキャンペーンをしていて、訪ねたところ「ぜひ植えてほしい」と言われて、タイミングの良さに驚きましたね。深草のみなさんにも喜ばれました。

その3年後に、私が洛西の副区長になったんです。藤袴が大原野で見つかったということは聞いてはいたんですが、まさか自分が大原野、洛西に勤務することになるとは思ってもいませぬでした。大原野で見つかった藤袴なので、さぞかし洛西でもみなさんご存じだろうと思っていったら、ほとんど誰も知らない。「これはあかん」と思って、3年間で上手くみなさんに気づいてもらって、盛り上げていきました。

上京区に来て、もうさすがに藤袴との縁もないだろうと思っていたら、春日学区のみなさんが何かで藤袴のことを知って、「春日にこそ藤袴」と思われて、いろいろ調べていくうちに深草で活動している人に繋がったみたいです。それで深草の方が、私が上京区長になったということを知って、すぐに連絡をくれました。ここの庁舎がまさに環境に配慮した「エコ庁舎」で屋上緑化もしていたので、そこに昨年藤袴を地植えして、地域の人にまたすごく喜んでもらえました。

上京独自の取り組みではないですが、京都市内の220学区を「エコ学区」として認定していて、学区ごとにてんぷら油の回収など、京都市が進めている環境の取り組みを熱心にやってくださっています。上京は保健協議会の保健委員さんたちがすごく熱心に活動してくださっていますね。

京都市には市全体でゴミの半減を目指す「しまつのこころ条例」がありますが、上京区では食べものだけでなく、そのこころが生きているように思います。例えば子ども祭りでは、いろんなコーナーをつくって子どもたちを遊ばせるんですが、その中で西陣織の端切れや糸繰りを利用していろんなものをつくります。展示を見ていたら、西陣織の紋紙（柄を織るための紙）が展示の表装として、パネルの後ろに使われていて驚きました。そういう西陣で大量に出る廃棄物を上手に使っているんです。

※9 株式会社京都放送。呼称：KBS 京都（Kyoto Broadcasting System Company Limited）

エコという意味では、生活の中で、私も意識していない、気づけてないような部分があるかもしれません。「子どもたちに葉をつくらせるから」といった時に、大量の金欄の端切れが簡単に手に入る。「葉に端切れを使おう」という発想が当たり前で、そんなことがたくさん、自然なこととして上京には根付いているんです。

■思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

子どもが小さい時にはよく遊びに連れてきました。西側に児童公園があって、蝉採りをしたり、息子が少年野球をしましてからはグラウンドで頻りに野球をしたりしていました。

自分自身の思い出としては、もう20年以上前だと思うのですが、「松の上に桜が自然にはえた木が御所にある」とニュースがあって見に行ったことがあります。あとは紅葉の時期にフラッと立ち寄るのが好きです。

最近では、孫を連れて森の中に紙芝居や絵本が置いてある「母と子の森」に行きました。孫がその紙芝居を気に入って、これはいいなあと思いました。あんまり知られてないと思うので、勿体ないと思います。今はなかなか紙芝居に触れる機会がないですけど、ちゃんと紙芝居のフレームも置いてあって、いい環境だと思いました。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などはありますか？

先日の大雪の時は綺麗でしたね。バスに乗って横を通っただけで、行きたいと思うくらいです。御所は、四季が感じられる場所です。やはり秋の紅葉も綺麗ですし、新緑の時期も歩いていたら気持ちがいいです。紅葉を楽しんで、それが散った時に地面に広がる色とりどりの落ち葉を見ていたら、気持ちが休まるというか、すごく落ち着きます。

好きな時期は年齢にも依るんじゃないかと今は思います。昔はそこまで意識していませんでしたが、子どもを連れて元気に遊びに行くと「ああ緑が多くていいな、森林浴や」と思っていました。子どもが小さい時は、カブト虫を採りに行ったりする遊び場のような場所でしたが、今では散歩をしながら観賞するようになりました。梅林も好きで、以前からあるのは知っていましたが、実際に見てみて「こんなに広いのか」と驚きました。前に市長も「こんなにいいところがあるのに京都の人はあまり知らない、勿体ない」とおっしゃっていましたね。

砂利道と広い空が見えて、緑があって、鳥のさえずりが聞こえて、バードウォッチングができる、あの空間がいいんですよ。深草も駅から10分ほど進んだら里山に入るような場所で、鳥がたくさんいるんです。あの雰囲気はすごく好きで、同じような空間が御所にあるということを、私も全然知りませんでした。なので、もっとアピールをした方がいいと思います。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由におっしゃってください。

もっと御所のいいところを、何かの機会にPRできたらと思います。すごく閉鎖的な印象はありますね。通年で開放されたことで少し身近にはなったと思いますが、今までは「御所や、囲われてるし入れへん」といった印象がありました。身近に感じられる接点がありません。御所の一番素敵な自然の魅力よりも、グラウンドがあって、テニスして野球するというふうには捉えていましたね。年を重ねてきたら散策して、バードウォッチングして、となるかもしれない

ですけど、若い世代はやっぱり遊ぶ方に行くので、そうした自然の魅力に気づくところまで辿り着きにくいんじゃないかと思います。

歴史も含めてアピールできるかもしれません。上京の人、特に御所周辺の学区は上御霊神社の氏子さんでもあるし、すごく古い歴史があって、それが連綿と受け継がれてきていて、すごいなあと思います。地域に浸透して、根付いていて、当たり前のようにみなさん意識をされています。

改めて身近に感じられるようなきっかけが必要だと思います。今はもう通年になりましたが、以前は一般公開の日になったら、ものすごい数の人が周辺を歩かれるので、「あ、公開してんのかあ」とそんなふうに眺めてたりしましたし、京都人にとっては近くにあるって当たり前で、いつでも行ける感覚があって、良さを知るところまでいかなかったのかもしれない。先日、京都御苑であった講演会に寄せてもらったり、NPO 法人京都観光文化を考える会・都草の話の聞いたりしていると、歴史の好きな方や年配の方は何度も足を運んでおられます。子育てを終えて、気持ちに余裕ができたなら行ける場所なんですかね。

スポーツをしている人にとっては二条城と一緒に御所は走る場所かもしれません。昔、京都市が「元旦ロードレース」というのを開催していました。元旦に参加者を募って御所の周りを走っていたんですよ。京都市が主催で、地域の体育振興会の役員さんがスタッフになって、何年前になくなってしまったんですけど、御所の周りを走るということがすごく定着していました。

それから、食堂のおうどんもおいしいって評判ですね。叔母から「御所言うたらあそこのおうどんがおいしいから」とよく聞きました。やはり京都はそういう意味でも食文化が優れていると思います。和食もお酒も、抜群だと思います。上京では来年度は食文化にポイントを当てていくつもりなんですけど、お酢やお酒がつくられていて、味噌があって、和菓子ももちろんあって、いろんな食文化が上京の中にあるんですよ。今まで気づいてなかったような、食文化としての上京をもっとアピールしないといけないと思っています。

2017年2月3日 インタビュー
聞き手：田村省二、山本昌世

○中谷 香さま プロフィール○

京都市生まれ。1975年京都市入庁。2007年伏見区深草支所まちづくり推進課長、2010年文化市民局男女共同参画推進課長、2012年西京区洛西担当副区长、2015年4月から上京区長。